

A photograph of a tree-lined street with pink text overlaid. The street is paved with asphalt and has a white dashed line down the center. The trees are bare, suggesting a winter or late autumn setting. The text is in a stylized, pink font.

貴方に出会って
たくさんの事を知った

『あの夜から』

「お前ら変なことするなよ？」

「は？絶対ありえねえだろ。」

あの時、貴方はそう言ったよね？

なのに、なんであんなことしたの？

「可愛い顔で寝てんなよ。」

貴方はそう言って私の髪に触れた。

あっという間に私は心^{ココロ}を奪われた。

初めて貴方と出会ったあの日...

名前も顔も何も知らない

あの日までは

赤の他人...

あの日からは――...

「ウインナー下さい!!」

単純で空気の読めない
超が付くほどの純粋な女の子

北沢愛菜

「俺の触ってみる？」

エロくて俺様で空気の読めない
超が付くほどのバカな男の子

神山安斗

私から見た貴方の第一印象は
『怖そうな人』。

貴方から見た私の第一印象は
『気の合わなさそうな女』。

2010年01年05日。

～♪

【不在着信1件】

きっかけはこの1本の電話だった。

今日で帰省も終わりかぁ…。

私はそんなことを思いながら、ソファでダラけていた。

「ねえ、おねえちゃん。今日暇なら菜々ちゃんのバレージョーに行ってあげなさいよ。」

私のそんなダラしがない姿を見て、ママが呆れたように言った。

私は現在大学2年生。

次で3年になる。

ちなみに大学の部活で寮生活をしている。

中学生に上がる時、親にバレーボールを進められたのがきっかけで

今でもバレーボールに携わっているのが今の現状である。

私の姿を見て妹までもがバレーボールの道に走った。

まだ小学生。

毎日がバレー漬けの日々で、休みなんか全くないらしい。

この前なんか、泣きながら電話をかけてきた。

内容を聞いた限りじゃ、スランプに陥ったらしい。

ママから聞いた話、菜々は私の事が大好きらしい。

この前も『一番大切な人に贈る短い手紙』とかいう手紙を

学校の授業で書いたらしく

ママからメールでその内容が送られて来た。

前は

「おねえちゃん怖いから嫌い」

なんて言って嫌われていたのに。

まあ寮で離れたからってのもあると思う。

私もなんだかんだバレエが好きだから、今でもバレエに携わっているし

妹のバレエにもちょくちょく顔を出していた。

「行くの？」

自分の部屋でシューズやらTシャツやらを準備していると

ママが扉の隙間から覗いていた。

「まあ暇だし。」

なんもすることないから。

唯一の長期休みである冬の帰省。

見事に年明けは誰とも遊んでいない。

約束して待ち合わせしてって言うのが面倒くさい。

だから帰省中は一人で街に出たりと、自分の時間を堪能していた。

朝から菜々のバレーを見に行った。

監督さんに「球出しお願い」と言われて、打ってあげたりした。

久しぶりにこんな打った...

おかげで体は一瞬にして筋肉痛だ。

お昼休みに入り、カップラーメンを食べながら携帯を開いた。

【不在着信 1 件】

誰？

【渡有莉】

...有莉？

なんだろう？

有莉は大学の友達。

部活の仲間だ。

私は有莉に電話をかけた。

プ°ルルルル————……カチャ

『もしもし～あいちゃん！？』

「久しぶりー、電話した？」

『あっ、うん！！あのさ、今日東栄と呑みするんだけど来ない？』

「えー、なんで～？」

『なんか、嘉風と呑みしたいって奴がいて～。お願いっ！！！！』

東栄かぁ～...

「星崎君いるなら行く。」

星崎君は私の好きな人。

『ええ～、いないよ～。...ダメ？』

別にダメじゃないけど...

「ママに聞いてみるわ。」

『まじっ！？わかった～！！電話ちょうだいね。』

「はいはい。」

暇だしっか。

とりあえず、ママに言っところ。

「今日有莉が夜呑みしようって言うから夜いない。」

「最後の夜なのに～？」

ママは頬をプーと膨らました。

ガキっ！！

と思いながらも、色々突っ込まれるのも嫌だし、何も言わないでおいた。

とりあえず、あたしは有莉に電話をかけた。

フル——…ガチャ

早っ！！
ワンコールだったし。

『はい！！どうだった？』

「いってよ～。けど今、妹のバレエ見に来てるから遅くなるかも～」

『わかった！！とりあえず8時頃から呑みするから～東栄の寮来て。』

「はい、わかった。じゃあ、また連絡する。」

東栄大学。

男子の大学バレーで一番強い学校。

去年は全国制覇を成し遂げていて、全日本選手も何人も選ばれている名門校。

まあスポーツ全般的に有名な大学だ。

バレーは確かにすごいけど、噂も半端なくすごかった。

噂——...

女の。

"東栄と呑んだらヤられる。"

こう言った噂だ。

まあ、この噂は特定の人物だろうけど。

だって私今、東栄大学に好きな人いるもん。

星崎秀樹君★

私が5年間も片思いしてる人。

まさか東栄に行くとはね...

星崎君が東栄に行くって決まった時、死ぬほど嫌でリアルに病んだ。

高2の時、クールで独特な雰囲気を持つ一つ年下の彼に一目惚れをした。

そして私が大学に入って彼と初めてメールをした。

彼とメールをしてから今まで全く進展せず

2009年12月26日。

ようやく今回の帰省で初めて星崎君と呑みをした。

私はこの日、初めて東栄の寮に行った。

そして、星崎君と一夜を過ごした。

スウェットを借りて、一緒にコンビニ行って、部屋で色んな話をして、一緒のベッドで寝た。

何もなかったけど

大好きな人とこんな一夜を過ごせたら、誰だって幸せでしょ？

今回の帰省の思い出は、星崎君との呑み。

のはずだった—...

> 出会い

—17:00—...

ようやく練習が終わった。

とりあえず、家帰ったらシャワー浴びて～

服何着ていこう...

あ～有莉に電話しなくちゃ。

まあ帰ったらでいっか。

車に揺られながら窓の外を見つめた。

家に着いてすぐにシャワーを浴び、支度を始めた。

服は鍵盤の絵が描いてあるインナーに、灰色のプリーツのスカートにトレンカ。

黒のジャケットにアニマル柄のパンツ。

いつも通りのメイクをして支度完了。

有莉に電話をかけた。

フ°ルルルル——...ガチャ

『はいはい。終わった？』

「終わったよ。今から家出るから～」

『わかった！！有莉今もう東栄の寮だから～
駅着いたらタクシーで東栄の下のバレー部寮って言ってだって～。』

「はい。わかった。じゃね～」

私は東栄寮へ向かった。

向かっている途中フッと

やっていけないのかな？

知り合いとかいないし...

うわあー...

大丈夫なのかなあたし...

不安が頭の中を過ぎった。

私は少し後悔しながらも、今回2度目の東栄大学の駅に足を運んだ。

「東栄の下のバレ一部寮まで。」

そう言うと、タクシーの運転手さんは慣れた手つきで行き先まで向かった。

5分位して、一件のアパートの前に止まった。

お金を払いタクシーから下り、有莉に電話をする。

プッルル——…ガチャ

『着いた？』

「うん。」

『待って。今迎え行くね～』

そう言って電話が切れた。

電話が切れてすぐ、アパートの2階のドアから有莉が顔を出した。

有莉は「こっちだよ。」と言い、手招きした。

私は有莉の後に着いていった。

有莉は階段を上がり一番近くのドアに手をかけ、ドアを開けた。

その瞬間、微かに心拍数が上がったのが分かった。

やばっ...緊張する...

下を向きながら部屋に入る。

顔を上げ、部屋の中を見た。

そこには男の人が二人座っていて、こちらを見ていた。

「お邪魔します。」

「お～、いらっしゃい。」

私の言葉に反応してくれたのが、有莉と友達の安岡巧君。

前は安岡君の事『鼻デカ鼻デカ〜』とか言って馬鹿にしていた。

だからまさかその人と呑みをするなんてね…。

でも、近くで見たらそんな変な人じゃないじゃん？

むしろ普通—...

なんか、ごめんね。...安岡君。

と、今までの事が申し訳なく思えたので、心の中で謝っておいた。

安岡君の隣に座っている、もう一人の方に目を向けた。

.....なんて言うか。

『怖っ！！』

つか、この人が本当に嘉風と呑みしたいって言ったの？

めっちゃ無愛想じゃん！！

絶対無理～…

安岡君の隣にいる男の子は…

とりあえず目力が半端ない。

第一印象は『怖い』。

—…決定。

私が来て全員が揃ったという事で、安岡君達はお酒の買出しに出かけた。

部屋に私と有莉。

有莉は「来てくれるとは思わなかった～」と笑っていた。

いや、

リアルに来なければよかったかも…。

私はそんな事を言えるはずもなく、

「有莉が一人じゃ嫌かなあと思ってね。」

とあたしは言った。

「てか聞いてよ～！！神山ちょーエロいの！！！」

急に話が変わって、有莉が眉間にシワを寄せて話し出した。

神山…？

あの怖そうな人のことか？

「なんで？」

私が訊ねると、有莉は待ってましたとばかりに話し始めた。

「だってね、あいちゃんに来てない時に、神山がパソコンでチョコボーイ山口とか言うのを見せてきて～！！それ見て神山、普通に爆笑してるの。まじありえないし！！」

(※チョコボーイ山口を知らない人はYoutubeで検索してみてください。)

え～…キモ。

てかヲコホーイ山口ってなんだし。

有莉の話聞いてる限りでは、嫌な想像しか出来なかった。

なんだか、有莉の話を聞いて、この呑みに参加した事がもっと嫌になった。

リアルに帰りたくなってきた...

第一に、あたしは男が苦手だ。

——なんて言うか、男の中の男が苦手...

そう、神山みたいな—...

安岡君達が買出しに行ってから15分くらい経った頃、

2人は大きなビニール袋を両手いっぱいにぶら下げて帰って来た。

「ありがとう。」

「おおー。」

「……」

返事はやっぱり安岡君だ。

買出しから帰って来た安岡君と神山は、テキパキとコップやおつまみやらを机に並べている。

それをあたしと有莉は眺めていた。

しょっちゅう呑みとかやってるらしいから

慣れてるんだろなあ。

そう思うと、彼らの行動全てがそう見えてしまう。

呑みがスタートした。

安岡君は色々と気を使ってきてくれて

お酒を注いだり、話を振ってきたりと色々してくれた。

でも例の神山は——…

——よく分からない。

まあ、だからこっちからわざわざ、話をかけようとも思わなかった。

結局、呑みがスタートしてから1時間くらい神山とは話の『は』の字もしなかった。

——現在 2 1 : 0 0 ——

う～ん...

あたしには今究極な問題がある。

何かって...？

それは——...

めっちゃめっちゃお腹が空いてる。

お昼のカップラーメンから何も食べてないから、さっきからお腹がグーグー鳴っている。

しかも、一日動いてたっていうのが、この腹空きの第一の原因だ。

さて、どうしようか…。

空腹でお酒を飲んでるから酔いが早そう。

安岡君にとりあえず聞いてみるか。

「ねえねえ。」

「んー？なしたあ？」

「この近くってコンビニないの？お腹空いちゃって。」

「おー、あるよ。」

「なあ。」と安岡君は神山に話を振った。

すると、神山は今までの無愛想な態度が嘘みたく――

「お前一人で行けよ。」

...はい？

今の聞き間違いですか？

あたしは耳を疑った。

なんだか、すごくからかわれている感じがした。

いや、本気で言ってんのか...？

「え、あたし場所知らないもん。」

「面倒くせえー、一人で行ってこいよ。」

——は？

つか、さっきまでと態度違いすぎじゃない？
めっちゃ無愛想だったのにさあ。

「場所知らないー！！」

「しらねえ。」

神山は面白がっているようにしか見えない。

「誰かー！！一緒にき「分かったよ。行ってやるよ！！」

「来て」と私が言う前に神山が私の言葉を遮った。

「えっ、本当に？」

「おー、ほらっ!!行くぞっ。」

「ちょ、ちょっと待って。」

さっきまで一人で行けとか言ってたくせに

自己中な奴だな～

と、そう思ったけど、ここはまず何も言わないでおいた方がいいと思ったので、素直に従っておいた。

私は急いで鞆から財布を取り出し、玄関の扉によっ掛かっている神山の所へ走った。

.....

てか、気まずくない？

ほんのさっきまで話してなかったのに....。

「財布なんかいらねえよ。」

さっきまで全然絡んで来なかったじゃん。

「お腹すいたから、なんか買うの!!」

少しの不安を感じ、あたしは神山と二人で部屋を後にした。

>知らない道

——知らない道。

コンビニまでの道を二人で歩く。

1月の夜はさすがに寒かった。

——寒っ。

ジャケットを着てても寒かった。

「寒いね〜。」

変な意味で言ったわけじゃない。

「寒い？」

「うん、寒くない？」

「いや、あんまり。貸してやろうか？」

あたし、そんなつもりで言ったんじゃないよ？

神山は自分が着ていた東栄のジャージを脱いで渡してきた。

「平気なの？」

「じゃあ返して。」

「貸シテクダサイ。」

何が可笑しいのか隣でククッと笑っている神山。

貸してもらった分際で文句を言えるわけもなく、隣で笑う神山を横目でジッと見た。

一気に、性格変わってないかコイツ？

あたしは貸してもらった東栄のジャージを羽織った。

おっきい....。

「...ありがとお。」

「おー。」

ちょっと、不覚にもドキッとした。

いや、
気のせい、気のせい。

あたしはそう思うことにした。

コンビニまでの道のり、色んな話をした。

意外と話せる奴だな。

話してて面白いし。
冗談も通じるし。

「お前、畑に埋められるぞ。」

冗談も言うし....

って、おい、おい...

さっき話し始めたばっかじゃないですか？

最初と態度違いすぎでしょ。

どんだけ人見知りだよ。

なんて、心の中ではこんな風に思っていたものの

実際、そんな会話が楽しくて、珍しく男の人に対して素でいる事ができたんだ。

こんな数時間で、気を許した男の人は始めてだった。

さっきまでの気まずさはどこに行ったのか....

——コンビニに到着。

「イチゴっ!!これ飲みたい!!」

「入れれば?あとは?」

「缶酎ハイ、何個かいい?」

「いーよ。あっ、俺ビール」

あたしは缶酎ハイを

神山はビールをカゴに入れた。

選び終わりレジへ行くと

——...

いい匂い。

寒い時って食べたくなるんだよね。

...おでん。

「おでん選ぶ〜」

あたしがそう言うと
店員さんがおでんの入れ物を手に取った。

「ちくわぶと〜、白滝と〜、大根と〜、あと一ウインナーください!!!」

店員さんはあたしが言った通りに、おでんの具を器に入れていく。

あたしにとっては普通の行動。

...のはずだった。

やった!!

おっでん〜♪

呑気なあたしをよそに、気まずそうにしている男二人組に

——気づくはずもなかった…。

あたしは財布に手をやり、お金を出そうとした。

「会計一緒に。」

「へっ？」

「一緒に買ってやるよ。」

「え、悪いからいーよ〜。」

「いいつの。財布しまえ。」

.....

神山クン、怖ソウナンテイッテゴメンネ。

心の中で謝っておいた。

ここは神山に甘えることにし、2人でコンビニを後にした——。

>話

帰り道、あたし達は親密な会話をしている。

「って言うか、有莉と安岡君大丈夫かな？」

「いや～、絶対チューとかしてんべ？」

「ええー！！そっかなあ？」

「絶対してるって!!」

只今、めちゃめちゃ盛り上がってます。

寮の目の前。

お互いに息を潜めた。

神山の後に続き、階段を登る。

「シーー。」

神山は振り向き人差し指を立てて念を押してきた。

あたしは首を縦に何回も振った。

ガチャッ———...

静かに部屋のドアを開けた。

ドキドキ———

.....

「——ヤベッ!!!」

うえッ!!?

あたしは神山に押され外に出た。

なにになになに———!!!?

「なにッ!？」

状況を把握できていないあたしは、ドキドキしながら神山に尋ねた。

リアルなんかしてたかッ!?

再び、あたしと神山は二人で部屋の中をそっと覗いた。

っ!!!

おおっ！！

予想とはちょっと違ったけど...

あたし達の目の前には、ソファーに有莉と安岡君が寄り添っている姿だった。

あれっ？

うちら行く時、安岡君ソファー座ってなかったよね？

ってことは、てことは～...

あたしと神山がずっと玄関で覗いていると

「何してんの？」

安岡君が呆れた顔で言った。

そりゃ、こっちの台詞だっつの。

「こっちの台詞だっつうの。」

おっ？神山と考えてることがかぶった。

「は？俺ら何もしてねえよ。」

「嘘つけ～！！」

「嘘じゃねえし。まじ話してただけ。」

「なあんだ、つまんねえ～。俺ら、安岡達がキスしてんじゃないかって話してたんだよな。」

神山がいきなり振るから、あたしは慌てて頷いた。

すると安岡君は、「残念だったな。」と言い、ハハッと笑った。

なあーんだ、すごくいい感じだったから、チュー位してるかと思ったのに…。

と、有莉の方を見てみると

少し酔っているのか、なんだかとても可愛らしくみえた。

2人の光景が目に焼きついていた。

めちゃめちゃいい感じだったなあ～。

なんて思いながら、さっき買ってもらったおでんを取り出し、蓋を開けた。

ん～…良い匂い…。

あたしがおでんに手を付けようとした時…。

「つーか、まじコイツありえねえんだけど!!」

——……は？

あたし…？

神山があたしを指差しながら言った。

もちろん、あたしは意味がわからない。

分かるはずもない。

あたし何かしたっけ？

「なんで？」

うん、なんで？

あたしの疑問を代わりに安岡君が聞いてくれた。

「だってよー、コイツおでんの具でウインナー頼むんだぜ！！まじ俺めっちゃ恥ずかしかったし。店員もすげー動揺してたんだから。」

「は？まじ？」

神山が言ったことに、安岡君まで笑いながら「ありえね〜」とか言ってる。

——…はい？何が可笑しいわけ？

意味わかんない。

ってか何…？その思考回路…。

「ぎゃはは、お前まじ最高〜！！！」

神山はお腹を抱えながら大爆笑し、さっきとは矛盾している言葉を発している。

...どっちだよ。

さっきは「ありえない」とか「恥ずかしい」とか言ってたくせに。

神山と安岡君が大爆笑している中、あたしは有莉に

「そんな可笑しいの？」

そう聞くと

「普通は買わないよ。」

有莉は変なものを見るような目で答えた。

えええ————！！！！

あたしはビックリするしかなかった。

あたしはその後、散々だった。

おでんを食べていると

「早くウインナー食べよ。写メ撮ってやるからー。」

ニヤニヤしながら携帯を向けてくる神山。

「早くウインナー食えって。」

「は？嫌。てか、もお食べないし。」

「はあ～？俺が買ってやったのに？」

うっ…、そうだった——…。

神山が買ってくれたんだった。

「ほら、早く食べよ。」

神山の横でケラケラと笑う安岡君。

その横ではあたしの姿を哀れんだ目で見ている有莉。

まじなんなの…。

結局、あたしはウインナーを食べなかった。

と言うか、あれだけ言われて食べれる奴なんかいないだろう。

散々いじられて、ようやくそれが治まってきた。

しかし....

う〜...トイレがめっちゃ近い。

30分に1回は行ってる。

お酒を飲むとトイレがすごく近くなる。

しかも、今は夜中。
なるべくならトイレには行きたくないー....

なのに！！

誰だよ！！

怖い話し始めたのは！！！！

トイレは外。

行きたくないけど漏れそう...

実はこの時、嫌な予感がしてんだよね...

行くたびに気になっていた.....。

——トイレの窓。

ずっと開いてるんだもん。

怖い話をする前までは...

.....

...

——…なんで!?

只今、トイレの中で混乱中。

なんでなんでなんでなんでなんでなんで——！！！！？

さっきまで開いてたよね？

今

——っ閉まってんだけど。

は？

あたしは一人でパニックを起こしながら、慌てて部屋に戻った。

小走りで戻ってきたあたしを見て

「あいちゃんどうしたの？」

と、私の顔をみて有莉が不思議そうに訪ねて来た。

——いや、もしかしたら神山が閉めたかもしれない。

あたしがトイレ行く前にトイレ行ってたし。

うん、そうだよ。

あたしは回らない頭を必死に使って考えた。

「なんかね、さっきまでトイレの窓閉まってたんだけどね、今閉まってたの。えっ、神山窓閉めた？」

「うん。」って言って欲しかった。

この時あたしは相当酷い顔をしていたと思う。

————…

「は？閉めてねえし。」

——…いやいや…

「うそ、閉めたっしょ？」

「閉めてないから。」

「いや、絶対閉めた。」

「は？見間違いじゃん？」

「見間違いじゃない。絶対閉まっていた。」

「酔ってんだよ。俺まじ閉めてないし。」

「絶対に閉まっていたもん！！！」

あまりにもあたしが五月蠅かったから

「は～？絶対閉まってねえって。」

神山は立ち上がった。

見に行ってくれるらしい。

——…って事は、まじで神山閉めてないって事じゃない！？

神山が玄関に行くと、安岡君まで

「俺も見に行く～」

と言って、立ち上がり玄関に向かった。

あたしも確認しに行くために着いて行く。

有莉は興味がないらしく、おでんを食べてる。

神山——安岡君——あたし。

と、神山を先頭にトイレへ向かった。

「つか、開いてんじゃん。」

「ほんとだ。」

え？

神山と安岡君が呆れて言った。

「嘘だ....。」

あたしは慌ててトイレの窓を見た。

へっ、うそ...、開いてるっ————！！！！

体の血の気が一気に引き、急激に怖くなった。

「きゃ————！！！！」

あたしは叫び慌てて部屋へ戻った。

「きゃ————!!!!」

叫びながらソファーにダイブ!!!

「いてっ!!っあつ!!!」

この声は有莉。

おでんを食べてたら、あたしが突っ込んできて汁をこぼしたらし。

けどね

それどころじゃないんだよ。

神山たちが部屋に戻ってきて

「見間違いじゃん。」

だの

「大げさなんだよ。」

だのと、とことん言われた。

けど、あたしの見てない所で

「俺閉めた♪」

と、神山が有莉と安岡君に言ってるなんて

——あたしは全く知らなかった。

あ～ハイそろそろ本格的に酔って来たかも。

酔うと足元がふらつき何故かテンションが上がってしまう。

足がガクガクだぁ——...

なんて思っていた。

——時刻は深夜2:30——

「そろそろ終わるか。」

安岡君のこの一言で呑みが終了した。

貴方の

言葉一つ一つが

仕草一つ一つが

私の心の中に刻み込まれていく...

安岡君は有莉を連れて自分の部屋へ帰って行った。

今は神山と2人きり——...

と言っても、特に好きとか言う感情もないから、ドキドキしたりもない。

第一に、安岡君達が帰る前...

冗談交じりに安岡君が

『お前ら変なことするなよ？』

そう言うと、

『は？絶対にありえねえだろ。』

って、即答で言われたし。

——だからって別にショックなんて思いもしない。

だって別に好きでもないし、だいたいあたしには好きな人がいるし。

神山だって5年目の彼女がいる。

お互いに、ちゃんと特定の人が居たから、なんの心配もしてなかった。

「あっ、化粧落としを忘れた!!!」

「は？落とさなきゃいーじゃん。」

それはないっしょー...？

あたしはそんな神山の言葉を見殺して

「あたしコンビニで買ってくる。」

もお、場所分かるし。

「俺も行く。」

一人で行くはずだったのに...

別に来なくてもいいのにー...

と思ったけど、口に出すのは止めておいた。

あたしは財布と上着を持って、神山と本日2回目であるコンビニへ向かった。

コンビニに着き、目当ての化粧落としをすぐさま見つけレジに向かった。

「300円です。」

言われた通り、財布からお金を取り出そうとした時

「えっ？いいよー。自分のだし!!」

「はっ？300円くらい出してやるよ。」

いや...

むしろ300円くらい自分で出すよ。

神山は「いいから!」と言って、結局払ってくれた。

そんなさり気ない気遣いに、少しドキッとした。

——こんな事、死んでも言えないけど。

会計を済ませ、あたし達はコンビニを後にした。

部屋に戻り、買って貰った化粧落としを袋から取り出した。

「...スッピンになるの嫌だな。」

一応、神山も男だし素顔を曝すのにさすがに抵抗がある。

「落とさなくていいじゃん。」

うるせえー。

簡単に言うなし。

「肌荒れるからそれも無理。」

神山は「どっちだよ。」と呆れながら言い、ソファーに枕を置いたり寝床を作り始めた。

「お前ベッド使っていいから。俺、こっち使うし。」

そう言い寝床の完成したソファーをポンッと叩いた。

まあ、あたしの反応は可愛いものじゃない。

「えー、本当に？ありがとう〜♪」

素直過ぎるだろうか？

空気が読めなさすぎだろうか？

こういう場合、「え、いいの？悪いよ〜。」とか言うべきなのだろう。

とりあえず、あたしは化粧を落とすことに。

ー……

「ちょっと!!何してんのっ？」

さっきあたしに「こっち使え」って言ったじゃん!!

なんでアンタが使ってんの？

なにが起きたかと言うと

何故かついさっき「ソファで寝る」と言っていた神山が、ベッドに潜り込んだのだ。

ってことは、あたしがソファー!!!?

「えー、あたしベッドじゃなきゃ寝れない。」

あたしが一人でギャギャ言っていると

「もお、別に良くね？」

「……………」

あっ、そう…

あたしは平気だけど、アンタ彼女いんじゃない。

まあ、神山がいいなら別にいいか。

あたしはこの時

何も知らなさ過ぎたのかもしれない。

男がどういう生き物なのかを...

化粧を落とし終えた。

スッピン....

うーわ、顔薄っぺら。

あたしは鏡を見ながら一人、自分の顔を見て萎えていた。

鏡越しから興味深々なのか、神山が覗いている。

「こっち向いて。」

「やだっ!!」

「いーじゃん♪」

「.....」

あたしは渋々、神山の方を向いた。

「別に化粧してても、しなくても変わんなくねえ？」

へっ？

なに言ってんの？

「かっ、変わるし!!薄いじゃん。」

噛んだ。

めちゃくちゃ動揺してる...

神山はベッドに寝っ転がりながら「そうかあ〜？」と、何とも嬉しい言葉ばかりを言うてくる。

こいつ慣れてる....。

あたしは、ほんのり赤くなった頬を隠すようにベッドに潜り込んだ。

————…

う～ん、眠くない。

「ねえ、全然眠くない。寝るの？」

「ああ？寝るよ。明日俺ら練習だもん。」

神山は眠たそうに答える。

あたしはつまらなくて、そんな神山にちょっかいを出し始めた。

だって最後の帰省日だよ？
もったいないじゃん。

けど、この行動が彼に火を付けさせてしまったなんてね。

「寝るから静かにしてて。」

そう言った神山は、あたしの腰周りに手を置いた。

くすぐったい...

あたし、くすぐり弱いんだよね。

「くすぐったい〜!!」

あたしは笑いながら神山に言うと、神山は「くすぐり弱いのか?」と言いままた横腹を触ってきた。

「そんなこと.....ぎゃっ!!」

ないと言いたいけど無理だった。

結局神山にやられっぱなしで、あたしが笑い疲れたのをいい事に「はい、おやすみ〜。」と言って寝ようとしていた。

悔しい〜〜〜!!

あたしは負けじと、くすぐり返してやった。

ビクッ

あれ？今ビクッってなったんじゃない？

「くすぐり弱いでしょ？」

あたしがニヤッと笑いながら聞くと

神山はあたしのくすぐりを避けながら

「弱くねーし」

とか何とか言って強がってる。

立場逆転だ。

神山の強がっている姿を見て、なんだか笑が込み上げてきた。

「まち止めて。明日練習死ぬ。」

「えー、いーじゃん起きてよーよー!!」

あたしはしつこくちょっかいを出し騒ぎたて、調子に乗っていると

ガシッ

急に神山はアタシの両腕を片手で掴み、もう片方の手で顎を掴んだ。

身動きが取れない状態だ。

いきなりの出来事にビックリして黙り込む。

そんなあたしを見て

「こうすると黙るんだ」
と、意地悪な笑みを浮かべた。

ドッカーっと一気に顔が熱くなった。

完璧に負けた気がした。

「やーだー!!」

あたしは恥ずかしさのあまり、神山から離れようと騒ぎ出した。

すると、

「ああ～、はいはい。もう寝るよ寝るよ。」

そう言って、逃げようとするあたしを、神山は抱きしめ引き寄せてきた。

ちょっとビックリ...

っと言うかドキドキ...

今、あたしは神山の腕の中。

小さい子供を宥めているかのように頭をポンポンと優しく叩いてきた。

あたしは絶えられず、その腕の中からすり抜けた。

恥ずかしさを誤魔化す為に神山に話しかけた。

「本気で寝るの～？」

あたしは上半身を起こして神山を見下ろした。

「……お前、北乃きいに似てねえ？」

は？

北乃きい？

「え？全然似てないし～。」

「いや、まじこの角度似てる！！」

全然似てるわけないじゃん。

言われたことないし。

「絶対似てないー！！」

「まじまじ。似てるって。」

「言われたことないもん。そう言う神山は、平岡祐太に似てるよ？」

「あーそれ、誰かにも言われたことある。」

あ、やっぱり？

「けど平岡祐太はカッコイイから似てない。」

と神山は否定した。

それから、あたし達はバカみたいにお互いの事を

『北乃きいに似てる』とか『平岡祐太に似てる』とか言い合っていた。

「はあ～、星崎君今何してんのかなあ...？」

気を抜くとすぐに口にしてしまう星崎君の名前。

だって好きだから。

神山の後輩である星崎君。

そしてあたしの好きな人。

「お前、また星崎かよ。」

「えー、うん。だって好きなんだもん。」

「それは分かるけど、あんまり他の男の前で言うなよなあ。」

え？

なんで...？

あたしの頭の中は沢山の？マークが浮かんだ。

でも、よくよく考えてみたら失礼と言うか、無神経だったと少し反省した。

——でもなんか口癖みたくなってるんだもん。

多少はしょうがない。

あたしは自分に、そう言い聞かせた。

「そういや、お前やった事あんの？」

ヤっ、やる——ッ!?
急に何言ってんのッ!?

あたしはいきなりの質問に戸惑ったが

「——は？なんで？」

平静を装って答えた。

「いやさ、俺初めては彼女とじゃないんだよね。」

「ふ～ん。」

「俺、今の彼女と一回別れたんだよ。んで、そんな時に別の女の先輩と初めてやったんだけど。なんつーの？教えてもらったわけ。まあ、彼女と別れたんだけど、なんだかんだ、やっぱり彼女が好きでより戻したんだけど～」

「……へー。」

後半のろけか...？

あたしは正直やったことなんか無いし、まずキスもしたことがない。

だからどう反応していいのかわからなかった。

「んで、あんの？」

「……………」

——なんでコイツに言わなきゃいけないの？

あたしは何も言えず黙っていると、何かを察したかのように、神山が口を開いた。

「えっ、もしかしてない？」

うるさいし…。

まじKY男だ。

「は？まじで？」

本気でビックリしているみたいだ。

神山は信じられないといった顔で見つめてくる。

あたしは『もおいいや、』と思い、小さく頷いた。

「え、えっ、まじ？本当にしたことないの？」

「本当だよ。嘘なんかついてどうするのさ。」

「まあ、そうだけど。うわー、意外。」

うーん、今なんか失礼な事をサラッと行ったな。

「ってというか、あたしまだチューもしたことないし。」

「……………は？——まじで？」

「うん。」

「お前それはやばすぎでしょ？」

「いーの。全部星崎君にあげるんだもん。」

.....あ、やばッ!!

星崎君の名前出しちゃった。

さっき言われたばっかなのに、と思い神山の顔を見た。

しかし、

——平気だった。

神山は口角を少し上げ、あたしの頭に手を乗せ

「おお、そーだな。初めては好きな奴とした方がいいよ。」

そう言った。

——時刻はもう3時を回っていた。

部屋の中は真っ暗だ。

しかし、目が慣れてたのか大体の物が見える。

さっきまで寝ると言っていた神山も、今は眠くなさそう。

もちろんあたしも目がかなり冴えている。

「愛菜。冷蔵庫からポカリ取って来て。」

冗談で言ってんのか...

まあ、いっか。

「はい。」

あたしは身体を起こし、ベットから降りようとした。

すると神山が何故か、目を丸くしてこちらを見ていた。

「なに？」

「——や、まじ？お前優しいな。」

あれ、冗談だったのか。

飲み物取っただけなのに優しいって言うの？

と、不思議に思いながら、取ってきたポカ리를神山に渡した。

渡したポカ리를勢いよく飲む神山。

その姿を見て、こっちまでのどが渴いてきた。

あたしが神山をジーッと見ていると、それに気が付いたのか

「飲む？」

と聞いて来た。

あたしは頷き、ポカ리를飲んだ。

あたしの隣では何故かニヤニヤしている神山。

...なに？

あたしがペットボトルから口を放すと

「間接キスしちゃったね♪」

と、意地悪い笑みを浮かべ、あたしの手からペットボトルを取り蓋を閉めてテーブルに置いた。

さっきの間接キスから始まり、なぜか神山は人が変わったかのようにベタベタしてきた。

——…なに？

あたしは本当に何にも分からなかった。

…知らなかった。

いや、知らなさ過ぎなのだろうか？

男の子がこういう時、何を思っているのか——…。

何を考えているのか——？

これがあの合図だったなんて——。

>初めて

「こっちおいで。」

神山はあたしの頭の下に腕を潜り込ませた。

今、あたしは腕枕をされている。

始めは凄く恥ずかしくて、思考なんて停止していたけれど、今はなんだかとても心地がいい。

.....人の温もりっていいな。

そう思った。

神山の温もりに包まれながら、それと同時に眠気があたしを襲う。

眠い...

目を瞑り、寝るか寝ないかの境目あたりで

——腕枕疲れないのかな？

と、疑問に思った。

あたしは瞑っていた目をそっと開けた。

「——ッ!!」

目の前には神山の顔が。

...目が合ってしまった。

寝てなかったらしい。

——という事はずっと見てたってこと？

さらなる疑問が増え、さっきの疑問は知らぬ間にかき消されていた。

あたしの驚いた顔を見て

神山はフッと小さく笑った——...

「可愛い顔で寝てんなよ。」

そう言うと、そっとあたしの髪に触れた。

そんな神山の仕草に、あたしはドキッとした。

神山の仕草に見入ってしまった。

——ほんの一瞬だった。

唇に何か触れた—....。

チュっ

触れるだけのキス。

「あーあ、ファーストキス奪っちゃった。」

神山はまた意地悪くニっと笑い、あたしの頬を撫でた。

あたしのファーストキスは、一瞬にして神山に奪われた。

正直、一瞬の出来事だったから、何がなんだか全く分からなかった。

——ただ、覚えているのは、キスした後の恥ずかしさだけ。

その後は、もうキスの嵐だった。

もちろん軽いキス。

唇と唇がくっつくだけの。

何回したかなんて分からない。

でも、何回目だろう...？

神山があたしの上に覆いかぶさってきた時だった。

唇の間から割って入ってきた舌。

————ッ!!!?

何——っ!?

あたしはビックリで、しかも、どうしたらいいのか分からず、結局されるがままだった。

口の中では神山の舌が動いてる。

「——ふっ…」

——息持たない…。

苦しくなって、あたしは神山の身体を押して引き離れた。

「ちょっ…」

「ん? どうした? 声出たじゃん!」

神山は満足そうな顔であたしを上から見下ろしている。

——うっ……。

もちろん凶星。

正直、初めての感触だった事で不覚にも気持ちいいと思ってしまった。

あたしは恥かしさのあまり、顔を背けた。

でも、そんな無駄な抵抗に過ぎなかった。

背けた顔を神山は自分の方に向かせ、また顔を近づけてきた。

んっ...

さっきと同じように神山の舌があたしの口の中に入ってくる。

抵抗なんて出来ない。

ううん、出来ないんじゃない。

——...してないだけなんだ。

あたしは神山のキスを受け入れていた。

ふっと神山の唇が離れた。

あたしは閉じていた目を開いた。

「舌出して。」

えっ？

舌出す...？

「むっ、無理っ！！」

「平気だって。」

「...無理。嫌だ。」

あたしがそう言うのと諦めたのか

「分かったよ。」

と言い、あたしの上からどいて横に寝っ転がった。

ホッと胸を撫で下ろしたのもつかの間

「じゃあ、愛菜からキスして。」

「お願いっ。じゃあ、ほっぺでもいいから。」

しつこいなあ〜。

訳のわからないお願いに呆れ、

どんなお願いだよ。

そう思いつつ、掛け布団から少し顔を出した。

神山はお願いのポーズを取っている。

.....本当にお願ひしてるよ。

なんかうける。

「ほっぺなら....。」

あたしはそう口が勝手に言っていたんだ。

「まじ！？じゃ、はい」

そう言って、神山はあたしの前に頬を向けた。

うん...

言ってしまったものはしょうがない。

いざっ!!!

ちゅっ

ほんの一瞬だけ。

「ほっぺには出来るんだ。」

神山はへえ～と一人納得していた。

「まあ…」

口よりは…ね。

「もう一回して？」

「ええー…。」

「はい」

またもや、頬をあたしの方に向けてきた。

拒否権はないって言うね。

う～ん...

さっきもしたし...

てか、待ってるし.....

「分かりました。」

あたしはしょうがなく折れた。

さっきと同じ.....

一瞬...

えいっ!!!

ちゅっ

.....

「残念でした」

「ちゅっ!!! ずるいー...」

「騙される愛菜が悪い〜。」

何が起きたかというと——……

えいっ！！

ちゅっ

ほっぺ目掛けてキスをした...

.....はずなのに。

『残念でした♪』

神山がとっさにこっちを向いたおかげで、口にしてしまった。

「ヒドイ...。」

「愛菜からキスされちゃった～♪」

「.....最悪。」

「こっちおいで。」

神山に体を引き寄せられ、機嫌を取るかのような軽いキスをされた。

そして、あたしは抱きしめられながら神山の腕の中で眠りに付いた。

>危険

「——んっ...」

目が覚めると、目の前には神山の背中があった。

なんだか少し淋しいと思ってしまった。

昨日の出来事を思い出して、一気に顔が熱くなった。

慌てて顔を布団で隠した。

「.....」

そっと少しだけ顔を出し、神山の背中を見つめた。

なんでキスしたんだろう...

誰にでもするのかな...？

そう思うと胸が痛くなる。

——今何時だろう？

あたしは鞆から携帯を探した。

まだ6時過ぎか...

全然寝れてないや。

多分寝たのは3時半位。

ベッドには気持ちよさそうに寝ている神山。

のんきな奴。

ふう、一息をして立ち上がった。

とりあえずトイレいこ。

あたしは床に置いてあった、神山のジャージを羽織りトイレに行った。

トイレの中で2時間前の出来事が頭に浮かんだ。

初ちゅー...

「しちゃった...」

そっと唇を指でなぞった。

「はあ...」

ヤバイ。

考えすぎだ....。

あたしは両手で頬をパチンと叩き、また部屋へ戻った。

部屋に戻ると、神山はやっぱりまだ、気持ちよさそうに寝ていた。

...本当、のんきな奴。

あたしは起こさないよう静かに再びベットの中へ戻った。

そして、また眠りに付こうとした——...

グイッ

なっ!!

あたしは勢い良く引っ張られた。

何にって...

神山に。

今、アツの目の前にはー...

さっきまで気持ち良さそうに寝ていた神山が。

何事だろう...？

この体勢は。

何故か知らないけど、あたしの上に神山がいる。

寝てたんじゃないの？

なんて、余裕をかましてた事に後悔をする事になる。

「ひゃっ！！！」

急に神山があたしの首に顔を埋めてきた。

それと同時に神山の手があたしの太ももを触る。

なんかっ...

エロイっ—————！！

どうなってんの！？

あたしは混乱した頭で、ひたすらどうしたらいいかを考えた。

——……う、う～…わかんないっ…

もおパニック状態だ。

あたしが混乱している中、さらにその行為は進んでいった。

首から神山の顔が離れたと思ったら、すぐに口を塞がれた。

「ちょっ——」

あたしが言葉を発したその際に、神山の舌が侵入してきた。

ビクッ

神山の舌の感触に全身が集中する。

——...何故か、気持ちいいと思ってしまった。

もっとしてほしい...

——そっと目を閉じている自分がいた。

しかし、神山の手が内ももを触れだした時

ハッとした。

あたしは両手で神山の唇を覆い、離れた。

「ちょ、ちょっと、待って...。」

そう言うのが、やっとだった。

神山は余裕のないあたしを上から見つめ

いったん離れた顔をまた近づけ

「ねえ、しよ。」

———そう言った...

えっ、

しよ。って...

...しよ。って...アレだよな？

あたしは今日、何回パニックを起こせば気が済むのだろう。

すると、また神山の唇が近づいてきた。

~~~~~ッ！！

「む、む、無理ッ！！」

あたしの上に乗っかっている神山を押して、自分の横に寝かせた。

「あはは——って...ゴメン.....。」

あたしは笑ってごまかそうとした。

...けど無理があったから謝っといた。

隣では少し不機嫌そうにあたしを見つめている神山。

無理なもんは無理なんだよお～…。

だって「しよ。」ってアレしかないよね!?

...絶対に無理だよ～

あたしはとりあえず、あの危険な雰囲気から脱出することが出来た。

ホッとしている自分がいれば、少し後悔している自分もいる。

...いや、拒否ってよかったんだよね。

あたしは、自分にそう言い聞かせた。

「思ったんだけどさ...」

ドキッ

神山がいきなり真剣な顔をして話し出した。

なにっ？

何故か心構えてしまった。

「...愛菜って、胸大きいよね。何カップ？」

.....

コイツ.....

「知らない!!」

あたしはプイッとそっぽを向いた。

何言うかと思えばっ

そんな事かよ!!

ちょっとでもドキッとした自分が恥ずかしい。

「触らして？」

はっ？

「やだ。」

何言ってんの。

「いーじゃん。さっき触れた時めちゃくちゃ柔らかかった。」

最悪っ!

「ばか、うるさい!!」

あたしは両手をクロスさせ胸をガードした。

「そんなガードすんなよ。ちょっとだけ。」

「やーだ。」

あたしがそう言うと、神山は何かをひらめいたのか

「ふ～ん、じゃあ——……」

————っ！！！！

くそっ！！

手が使えないっ！！！！

ガードしていた手は、神山があたしの上に乗っかり、重なってきた事で見事に押さえつけられた。  
。

...しかも——

唇まで塞がれた。

手がっ—...

挟まって——...

身動きが出来ないんですけどっ～～！！！！  
だから抵抗も出来ない。

もはや  
ピー————ンチ!!!

しかも、キスに気を取られ過ぎていて、胸の事なんてすっかり忘れていた。

押さえつけるようなキス。  
しかし一瞬、神山の唇がフッと軽くなった。

それと同時に逃げるチャンスだと思い、あたしはガードしていた手で神山の身体を押して離れた。  
。

————だけど実際、そのキスは単なるおとり。

「ラッキー♪」



「あっ…」

「甘いな。てか、まじデカッ！！」

結局、触られる落ち。

——コイツ、神山はエロさに関しては何枚も上手だった。

「——っ最悪!!!!」

そう言い、あたしはその後も、手で胸をガードしていた。

神山はそんな姿を見てフッと鼻で笑い

ガードしたままであるあたしの身体全体を、横からギュッと抱きしめた。

そして、あたし達は眠りについた——。

> 純粋

---

～♪

着信音が部屋に鳴り響く。

ピッ

「……………もしもし。…おー、飯行く。あー、分かった。」

多分、安岡君だろう。

ピッ

「安岡君？」

あたしは眠い目を擦りながら聞いた。

「そー。……こっち来るって。」

神山も眠たそう。

あたしは「ふーん。」と返事し、また目を閉じた。

そして

——寝がいを打ったときだった。

ゴツッ

んっ!?

なんか手に固いものが当たった。

...なに？

あたしが疑問に思っていると横から

「お前、手下にやるなって。」

神山は、少し引き気味にそう言った。

——.....

えっ...

まさか.....

これってッ——...

——いわゆる.....。

「わっ！」

あたしは慌てて布団の中にあつた手を外に出した。

初めて触った。

あんなに硬くなるもんなの...？

あたしの反応を見て神山は何を考えたのか

勢いよく外に出したあたしの手を掴んだ。

えっ、なに！？

...嫌な予感がした。

神山は掴んだその手を布団の中に戻した。

「触ってみる？」

は？

「〜〜待ってっ！！——無理っ—...」

あたしは慌てて手を振り払った。

な、何考えてんの——ッ！？

そんなあたしの姿を見て、神山は笑った。

「お前って、まじで純粹だよな。」

「え？...どこが？」

「.....」

「なに？その顔。」

神山は少し呆れ気味に

「お前、やっぱり嘉風だわ。」

と言った。

どういう意味だし…。

あたしは少しふて腐れながら

「は？あたしって嘉風っぽくないの？」

と聞くと

「うん。全く。」

と、神山は即答した。

…あっそ。

「や、でも愛菜、純粋すぎ。やっぱさすが嘉風。」

意味わかんない…。

てか、他の大学からみて嘉風って、純粋そうに見えんの？

う～ん、よく分からない。

むしろ純粋って……なに？

まあ神山曰く、

『嘉風は綺麗で純粹』ってイメージらしい。

どんなイメージ？

って笑いたくなった。

と言うか

さっきまではあたし、綺麗でも純粹でもないって思われてたってことか…。

なんか複雑——…

あたしはハァーと息をついた。

……グ〜——……

その心境とは裏腹にお腹がなった。

あ〜お腹がすいた…。

「お腹すいた〜!!」

「は？腹減った？じゃあ、そこのウインナーでも食べれば？」

神山はおでんの器を指差した。

「え…やだー。」

「は？せっかく俺が買ってやったのに。」

「そ、そーだけど。もお冷めちゃってるじゃん！！」

「じゃあ、温かいの食べる？」

「え？どうやって...？」

「...これ。」

神山は自分の下半身を指差した。

「なっ！！」

「冗談だよ。まじ純粹〜♪」

神山はそう言い笑っている。



冗談っ！？

本気で信じたし！！

あたしが膨れっ面をしていると、それを見て神山はさらに笑った。

「まじ、お前可愛いな。」

~~~~~っ！！

「——うるさいっ！！」

あたしは言われなれない言葉に動揺し、さらに顔が熱くなった。

信じらんないっ。

神山も神山だけど、本気にした自分も馬鹿だと思った。

恥ずかしすぎる...

恥ずかしさのあまり、あたしは神山に背を向けた。

すると、神山は後ろから

「なあ、ギュってしていい？」

そう言い、後ろから抱きしめてきた。

——...まだいいって言ってないのに。

もちろん照れ隠し。

「こっち向いて。」

——...何でだろう？

素直に従ってしまう自分がいた。

あたしは神山の方を向いた。

向き合うと、神山はそっと肩を抱き、自分のほうに抱き寄せた。

あたしなんか、いとも簡単に包み込んでしまうことから、男の人なんだと実感する。

——なんか落ち着く...

人の温もりをここまで気持ちいと思えるなんて。

神山だからかな？

あたしはそのまま、素直に抱きしめられていることにした。

「安岡達が出来たらビックリするだろうな。」

「え〜。そうかな？」

「一緒に寝てるし。来ねえかな。」

そう言った神山は、なんだかとても楽しそうに見えた。

神山があたしの頭を撫でる。

いつもなら頭を撫でられるのが嫌なあたし。

けど今は嫌じゃない。

なんでだろう...？

不思議な気持ちだ...。

そして、そのままあたし達は、また眠りについた。

>現実

ピ°ピ°ピ°ピ°ピ°ピ°ピ°ピ°ピ° —————...

うるさい...

時計のアラームが部屋中に鳴り響いた。

神山は眠いのか、荒々しくアラームを止めた。

そしてベッドから出て着替え始めた。

あたしはその姿をベッドの中で静かに観察中。

丁度、トレーナーを脱いだ時、Tシャツが捲れ上がり肌が見えた。

ヤバッ——！！

カッコイイ...。

小麦色の肌に、ガッチリとした胸板。

ドキッとした。

何度ドキドキしたことか。

あの体に抱きしめられたのかと思うと、体中の体温が一気に上がる気がした。

髪の毛を濡らしドライヤーで乾かしている姿でさえ、何故かカッコ良く見えてしまう。

重症だ…。

あたしは布団に潜り込み、神山を見るのを止めた。

するといきなり布団が捲られ、神山がベットに戻ってきた。

当たり前のように、あたしを抱きしめる。

ちゅっ

そして軽いキス。

あたしはこの時、不意に思ってしまった…。

『もっと一緒にいたい』

そう思った途端、時間が経つのがものすごく早く感じた。

神山が携帯を開く。

「安岡達もう来るって。」

あたし達は布団から出て、出る準備をした。

内容の濃い一日だったな.....。

部屋を出て寮の前で有莉達に来るのを待った。

少し淋しいと思ってしまった。

それは神山も一緒かな？

一緒ならいいな....。

少しでも自分と同じ気持ちであってほしいと思った。

頭の片隅でもいい...

神山の中にあたしという存在が1ミリでもいいから残っていてほしい。

そう強く願った。

神山安斗。

最初見たときは、無愛想で怖い人なのかと思ったけど

本当はすごく優しい人だった。

まあエロイってのは有莉の言う通りだったけど。

神山もあたしの第一印象は、良くはなかったみたいだし。

けど

それがこんな短時間、一緒に居ただけで変わるなんて...

凄いことだと思わない？

この日を境に

平和だった大学生活は、波乱の大学生活へと一変したのだった。

－ F I N －